

第58回 福岡県地方史研究協議大会

文化財保存と活用

－歴史遺産を現代にどう活かすか－

主 催 福岡県教育委員会 福岡県地方史研究連絡協議会

期 日 令和7年6月28日（土）

会 場 福岡県立図書館レクチャールーム（本館地下1階）

日 程

13:00 開 会

◆福岡県立図書館長あいさつ

◆福岡県地方史研究連絡協議会長あいさつ

13:10 研究発表（1）（50分）

「文化財の保存・活用の現状と課題」

特定非営利活動法人 北九州市の文化財を守る会

宇野 慎敏 氏

14:00 休 憩 （5分）

14:05 研究発表（2）（50分）

「郷土の建造物の保存と活用

～大牟田市庁舎本館をめぐって～」

登録有形文化財大牟田市庁舎本館の保存と活用をめざす会

藤木 雄二 氏

14:55 休 憩 （15分）

15:10 研究発表（3）（50分）

「伊藤伝右衛門邸に見る文化財の在り方」

八幡郷土史会 尾崎 徹也 氏

16:00 発表者による意見交換（20分）

16:20 閉 会

講師プロフィール

◎宇野 慎敏（うの まさとし）氏

所属	特定非営利活動法人 北九州市の文化財を守る会
研究テーマ	日中韓古墳時代装身具、九州古墳時代
主な執筆・著作	『九州古墳時代の研究』（学生社） ほか

◎藤木 雄二（ふじき ゆうじ）氏

所属	登録有形文化財大牟田市庁舎本館の保存と活用をめざす会
研究テーマ	炭鉱のまちの地域資源を活かしたまちづくり、地域活性
主な執筆・著作	『利用か？解体か？岐路に立つ“戦争遺跡”大牟田市庁舎本館』 『かるたでかたる市庁舎本館物語』

◎尾崎 徹也（おざき てつや）氏

所属	八幡郷土史会
研究テーマ	近代化遺産
主な執筆・著作	『福岡の近代化遺産』（弦書房） 『北九州市の文化財随想』（北九州市の文化財を守る会） 『北九州歴史散歩』（海鳥社）

[研究発表①]

文化財の保存・活用の現状と課題

特定非営利活動法人 北九州市の文化財を守る会
前理事長 宇野 慎敏

1. 文化財の現状

今から 50 数年前、田中角栄元首相による「日本列島改造論」によって日本全国各地は、公共工事に沸いていた。九州も九州縦貫自動車道、山陽新幹線、国道バイパス、各地に 4、5 階建てのアパートのニュータウン建設など至る所を工事していた。

当時、私は地方自治体の埋蔵文化財担当者として遺跡の発掘調査に関わってきた。国土交通省（当時は建設省）からは、国道バイパス工事のため 3 か月後の調査終了を依頼され、どうにか応えていた。

その頃の開発側の要望が、以下である。

- (1) 過去の文化財以上に、現在生きている人間の生活が優先。
- (2) 過去の文化財以上に、住居を建設する方が重要。
- (3) 渋滞の無い道路・高速道路の建設が重要。

文化財担当者もこれにはなかなか反論できなかったことを記憶している。

私も 30 代のころに北部九州最古の前方後円墳、山崎ハケ尻古墳を発掘調査して、何とか保存できないかと頑張ってみたものの、断念したことが記憶にある。

この山崎ハケ尻古墳の上には建物が建設され、35 年後に廃業し、現在は更地となっている。生活が大切なのは確かであるが、遺跡は一度壊されると残らない。その跡地前を通るたびに複雑な思いである。この北九州市の一角に弥生時代から古墳時代に入りかけの人間の痕跡があったが、今はわからないのではないかな。

2. 門司駅舎の問題

一昨年からイコモスも参入した経緯の「門司駅舎遺構」問題。これは単に門司駅の問題だけではなく、世界遺産となった官営八幡製鐵所と深くかかわっており、一方は世界遺産に指定され、もう一方は破壊された。北九州の地域の人たちが一丸となって門司まで石炭を輸送する鉄道、石炭を各地に輸出する港、そして八幡に製鐵所をという、この地域全体を発展させようとした意図のもとに、伊藤博文の娘婿の末松謙澄らが日本銀行の渋沢栄一に出資を依頼したものである。ただの鉄道の駅舎というわけではないのである。現在世界遺産と評価されるような明治の日本近代化の原動力となった遺産の一つとしてとらえていけないといけなのである。

3. なぜ文化財を保存するのか

文化財を保存するということは、その地域の歴史の一端を保存・継承するだけでなく、将来の人たちにとってもその地域に対して誇りを持ってもらうことにつながる。こうした過去の歴史の元に現在のわれわれが生かされているんだ、という自分たちの祖先・過去に誇りを持つということが大切なのである。

4. 保存・復元の効用

文化財は一目見てわかるものと、そうでないものがある。門司駅舎遺構などは、一目見て理解できる人は少ないのではないか。線路や駅舎の下に叩きしめた痕跡や周りとの高低差などが、遺構の存在を示すのである。あの場所まで貨車で大量の石炭を運び込み、すぐ下（北側）の旧門司港跡まで船を近づけ、石炭を積み込みやすいようになっている。それが大正時代以降にさらに埋め立てられ、現在の門司港駅になっている。

地中から発見された埋蔵文化財は、形が完全に残っていないことが多い。見学者に理解を深めてもらうために推定模型や復元図を置いたり、かつての姿を説明したりするとよい。

5. 文化財の活用・観光

過去の歴史の一端を保存することによって、地元の人たちの地域の歴史を継承していくことに役立つだけでなく、他の地域の人たちや旅行者、特に近年の訪日外国人に、日本の文化に対して非常に興味を持っていただけるのではないだろうか。畿内、大和から遠く離れた九州にもこのような伝統文化が継承されている。あるいは大陸に近いから弥生時代の絹織物は、大和より数倍も多く出土し、弥生時代の鉄器の量も大和の数倍も多く九州から出土している。このように北部九州だけでも他の地域に見られないような特色のある文化が数多く残されている。このことを訪れる人々に実感してもらえようであってほしいものだ。

6. 保存・活用の今後の課題

将来の日本に対して、現在でも問題になっているのが人口減少の問題である。我々の身近にも影響がみられるようになってきている。国道などの道路中央緑地帯の樹木が伐採され、コンクリートで舗装されてしまっている。年2回の草刈り予算が減少しているとのことである。文化財も保存できた。万歳！と喜んでいる時代ではないのだ。前方後円墳など保存されて全面芝生を貼ってきれいに見られるのは良いが、年2回の草刈り経費は続くのであろうか。

観光地化していき、訪日外国人や日本旅行者による税収増などを考慮しながら、今後の文化財の保存・活用を考えていかなければならないであろう。

[研究発表②]

郷土の建造物の保存と活用～大牟田市庁舎本館をめぐる～

登録有形文化財大牟田市庁舎本館の保存と活用をめざす会
事務局長 藤木 雄二

1936(昭和11)年3月に建設された大牟田市庁舎本館は国登録有形文化財です。時代背景を高校教科書(山川出版社 詳説日本史B)の記述からたどってみましょう。

<昭和恐慌からの脱出>1933(昭和8)年頃にはほかの資本主義諸国に先駆けて世界恐慌以前の生産水準を回復した。とくに、軍需と保護政策とに支えられて重化学工業がめざましく発達し、金属・機械・化学工業をあわせた生産額は、1933(昭和8)年に繊維工業を上まわり、さらに1938(昭和13)年には工業生産額全体の過半を占め、産業構造が軽工業中心から重化学工業中心へと変化した。…中略…1936(昭和11)年2月26日早朝、皇道派の一部青年将校たちが、約1400名の兵を率いて首相官邸・警視庁などを襲い内大臣・蔵相・教育総監を殺害し、国会を含む国政の中枢を4日間にわたって占拠した二・二六事件である。…中略…1937(昭和12)年7月7日、北京郊外の盧溝橋付近で日中両国軍の衝突事件が発生した(盧溝橋事件)。…中略…戦闘は当初の日本側の予想をはるかにこえて全面戦争に発展した(日中戦争)。

以上、「詳説日本史B」の引用。



市庁舎正面と南部分。屋上南部分には戦争遺跡の防空監視哨が残る。撮影：針金洋介

1934(昭和9)年10月 着工 1936(昭和11)年3月 竣工 鉄筋コンクリート造4階建(塔屋付)

塔屋高:34m 建屋南北長:63m 建築面積:1,378 m² 延べ床面積:5,175 m²

事業費:40万円(うち10万円は三井財閥が寄付)

設計:福岡県営繕課 基礎工事施工:東洋コンプレッソル株式会社 本館工事施工:柿原組

市庁舎の建設にあたっては、1933(昭和8)年7月に市庁舎建築委員会が組織され、51回の審議を重ねました。京都市庁舎、名古屋市庁舎、大阪府庁舎等に市議会議員3人、当局2人の調査団を派遣し、各庁舎の特徴を調査しました。福岡県営繕課の計画図案と建築専門技師(大手設計事務所)の計画案の両者を活かし、実施設計は福岡県営繕課に委託されて、当時の市庁舎としては最先端の設計と技術が駆使されました。設計図書は三井文庫(東京都中野区)で発見されました。建物は玄関部及び塔屋を中心に完全な左右対称で、本体部分の中央に塔屋を持つ構造は当時の庁舎建築の流行のスタイルでした。水平線を強調した4階建ての本体の上に、4階建ての塔屋とその上に展望塔を重ねて垂直線を強調したところがとてもバランスが良く、また、玄関入口の庇(ひさし)上の花をイメージした横3列の装飾とアールをとった各コーナーが柔らかさを表現した優れたデザインとなっています。

重化学工業部門で国内最先端を走っていた三井化学など、石炭化学コンビナートの立地する大牟田市・荒尾市は1944(昭和19)年11月から1945(昭和20)8月まで5回の空襲を受けました。6月18日夜間のB29による焼夷弾空襲で市庁舎本館の周囲の市街地は焼失しました。本館は議場屋根を2発の焼夷弾が貫通し、燃え上がりましたが、当直の職員が消し止めて議長席付近を焦がす程度の軽微な被害で済みました。本館は燃えずに空襲を生き延びました。建物が残ると共に、本会議と各委員会議事録等市議会の活動記録も残りました。本館は昭和の歴史を語る貴重な郷土の建物です。

国登録有形文化財の推薦書を書かれた九州大学の片野博名誉教授は大牟田市庁舎本館について、「本建築は、三井鉱山の石炭産出で栄えた大牟田市を代表する公共建築である。福岡にあっては、大規模な資本を有する事業所が採掘を行った点に特徴があり、「福岡県の近代化遺産」(日本近代化遺産総合調査報告書、福岡県文化財調査報告第113集、1993)の中でも石炭採掘、運搬に係る施設が数多く紹介されている。しかしながら閉山とその後の施設閉鎖により、多数の施設が取り壊された状態にあり、直接石炭産出に係る建築物ではないが、石炭の町、大牟田を象徴する建築としての価値は高い。」と評価されています。

【市庁舎問題の経過と展望】

2016(平成28)年4月14日に発生した熊本地震をうけて、市庁舎の地震対策が喫緊の課題となり、耐震診断を実施、「庁舎整備検討委員会」が2018(平成30)年5月に組織され、本館、新館、企業局、保健所・南別館等を総合的にどう活用するかが議論されました。

本館については、「改修して庁舎として利用する」と「庁舎として利用しない」の意見に割れて一本化することができず、両論併記になりました。市は翌年2月「市庁舎本館は取り壊して新庁舎を現地(本館東側)に建て替える」という基本方針案を作成し、市民説明会を開催。3月の市議会では基本方針案は十分な市民理解を得ているとは言えないとして、市議会本会議で庁舎整備事業費を削減する修正案が可決。8月、健康上の理由で中尾昌弘市長が不出馬表明、11月17日の選挙で関好孝市長が誕生。

2020(令和2)年2月新市長の体制で、再度、市民アンケートを行い、本館について「保存」・「解体」・「保存か解体かは財政負担による」の意見が約3割ずつで拮抗したことを受け、4月に「基本方針案を白紙に戻し再検討する」と発表しました。

その後、(株)日本総合研究所が調査を行い、市は2022(令和4)年2月に「庁舎整備の今後の方向性」を作成しました。さらに森ビル都市企画(株)の調査により、同年12月に「新・庁舎整備に関する基本方針」を策定

しました。

これらの成果物は、2024(令和6)年3月に組織された「新庁舎整備に関する基本構想策定審議会」で協議され、今年1月に9階建て、事業費150数億円の新庁舎計画を盛り込んだ「大牟田市庁舎整備基本構想」を関市長に答申しました。

そして、現在は「新庁舎整備の基本計画策定」の段階に入っています。

2031(令和13)年の新庁舎の完成・供用開始まで本館は庁舎として使用し、新庁舎に移転後、本館の民間活用が始まることになるので、本館の取り扱い決定は2029(令和11)年まで先延ばしになり、本館の取り扱いが決まらないまま、市民に納得がいく説明もなく「本館は庁舎としては使用しない」という方針だけを確定している状態です。

市は民間資金を導入して本館の利活用を進めるとしていますが、実態は凍結状態です。直ちに文化財保存活用地域計画を策定し、制度活用で本館の利活用の助成金を得る方策を決めることを、私たち「めざす会」は求めています。

市の担当課はこれに邁進する段階なのに着手することなく、今年3月には世界遺産・文化財室の室長と筆頭主査が早期退職されました。私たちはこの事実を大変重く受け止めています。私たちは合意形成に向けて、大牟田市と市議会議員に協議の場を求めます。「正」「反」「合」の積み重ねで、正と反の対立を乗り越え、より高いレベルの解決策を共に築きたい。その経過は大牟田市民に伝え、市民の皆さんと共に考えることが大切であると考えます。

「めざす会」は2019(平成31)年1月に発足して以来、多くの皆さま・団体に支えられて6年間活動してきました。活動は「大牟田市庁舎本館ファンクラブ」でインターネット視聴ができます。

最後に、私たちが考える市庁舎本館の改修と利用計画案を紹介します。

「本館の保存と活用を基軸にした市庁舎整備計画を!」「郷土の歴史と文化を学び、文化財保存活用地域計画の策定を!」の2種類の啓発パンフをご覧ください。

[研究発表③]

伊藤伝右衛門邸に見る文化財の在り方

八幡郷土史会

会長 尾崎 徹也

◆伊藤伝右衛門の生立ち

万延元年（1860）11月26日穂波郡大谷村幸袋（現・福岡県飯塚市幸袋）で生まれました。

父の伝六は目明かしとしてお上から十手鳥縄を預かっていましたが、本業は魚の行商でした。伝右衛門も天秤棒を担ぎ父親と一緒に魚の行商をしていましたが、生活は非常に苦しかったようです。

明治10年（1877）伝右衛門16歳の時西南戦争が勃発し、当時日当50銭と言う破格の高給にひかれ官軍の軍夫として従軍しています。



伊藤 伝右衛門

『福岡県官民肖像録』より

（博進社、大正2年）

◆炭鉱での貢献

明治31年（1898）、父、伝六の協力者であった中野徳次郎と共同で牟田炭坑を二瀬村に開坑。着炭してみると炭層は三尺層の薄層の上に、炭質は硫黄分の多い粗悪炭でした。

中野は炭坑の放棄を主張しますが伝右衛門は聞き入れずに採掘を続け、別途経営中の相田炭坑の権利を中野に譲渡、その引き換えに単独でこの炭坑の経営に専念しました。

明治38年（1905）のことです。その後まもなく大断層に遭遇、これでいよいよ絶望と思われましたが、この断層を切り抜けたところ、三尺層は消滅、良質の五尺炭層が出現。折からの日露戦争後の好景気に乗じて、牟田炭坑は伝右衛門の確実な収益源と成りました。

明治39年（1906）、遠賀郡長津村に開坑した中鶴炭坑は隣接する新手鉱区も買収して大坑区を形成、短時間の間に3本の坑口を開削し、直ちに優秀な炭層に着炭して、出炭量も急速に増加していきました。

勢いを増す伝右衛門の石炭部門は、明治 42 年（1909）に鞍手郡西川村（現・鞍手町）に泉水炭坑を開坑します。大正 2 年（1913）には傘下炭坑の総出炭は麻生に次ぐ 40 万トン記録するまでになりました。

◆大正 5 年伊藤合名会社宝珠山炭坑を開坑

朝倉郡宝珠山村（平成 27 年 3 月小石原村と合併して「東峰村（とうほうむら）」となる）に宝珠山炭坑がありました。豊かな田園地帯の朝倉郡内ただ一つの炭鉱です。明治 20 年ころ地元の零細業者がタヌキ掘りの採炭をしていました。明治 45 年（1912）に伝右衛門が 950 万坪の鉱区を取得、京都大学地質学巨智部博士に調査を依頼した上、開発に取りかかりました。大正 5 年（1916）に第 1 坑、昭和 10 年（1935）に第 2 坑を開坑し、その翌年正式に宝珠山鉱業株式会社を発足させました。

①開坑後殉職者を出さなかった保安優良炭坑

埋蔵量 44 万トン、月産 7500 トンの炭坑で坑内にガスは存在せず、立坑、斜坑と違い水平坑道のみで落盤もなく、開坑後 10 年間一人の殉職者も出さなかった保安優良炭坑でした。

『採炭夫にとって、生命取りのガスが皆無で、落盤が全くなく、其上水平坑道といふ、絶好な三条件を具備している宝珠山炭鉱は、開坑以来後十年間坑内の犠牲者を一人も出していない。』と昭和 12 年 4 月 22 日の福岡日日新聞で報じています。

②鉱員社宅の立派さは当時日本一

また鉱員社宅の立派さは当時日本一といわれています。

『社宅の入り口は当時貴重なセメントの玄関土間で半坪の物置が内部に設置してあり薪や炭の倉庫に成っていた。さらに台所は飲料水が水栓一つで自由に使い 2 畳の台所に 4 畳半と 6 畳の座敷には床の間があり一戸一戸にやや広い庭園が座敷の縁先に設えていた。まさに日本一と称せられる理想的労務者住宅である。』と昭和 12 年 4 月 21 日の福岡日日新聞で報じています。

③鮎（あゆ）踊る筑後川に浄水装置

宝珠山村は福岡・大分の県境に位置し筑後川の支流鼓川、小石原川に沿った絶景の山郷です。洗炭（石炭を水で洗って不純物や不良炭を取り除く作業）汚水によって村内の清流を汚すことに忍びず、伝右衛門は社長をしていた幸袋工作所の技術陣に英知を結集させ作らせた特殊の浄化装

置を設置します。

『石炭を洗った水を一滴も下流に流さぬよう同社の姉妹会社である、幸袋工作所があらゆる衆智を集め浄化装置を設置した。この浄水装置にかけると、水と炭とが完全に分離し、極めて清浄(しょうじょう)で一つの炭塵をも交えぬものが出てくるのである。然(しか)も此の水は一滴も川に流さず、又も此の水のみで新しい石炭を洗ひ、何度も何度も循環的に使用されるので、筑後川の上流は少しの汚水もなく、清浄の儘流れて、鮎の棲息に何の懸念もいらぬ。』と昭和 12 年 4 月 22 日の福岡日日新聞で報じています。

今でこそ環境問題が話題になりますが 88 年前の当時は富国強兵、日本の近代化が最優先の時代です。その時代にあって川を汚すまいとする伝右衛門の志は驚異です。この時代こんな事をする人は一人もいなかったのですが彼が幼少の頃、生活の糧にしていた魚の行商がそういう思いにさせたと思います。

◆財団法人「伊藤家育英会」の設立

明治 34 年(1901)女学校の設立に次いで教育事業における貢献は 大正 4 年(1915)に行った「財団法人伊藤家育英会」の創設です。

中学校までが義務教育となり、高校進学率が 100 パーセントに近い現在からは程遠い感事がありますが、明治期から昭和戦前における中等学校への進学率は筑豊地域においては 5 パーセント前後に過ぎず、ましてその上の旧制高校、専門学校、大学への進学者は極めて少ないものでした。向学心はあっても家庭の経済事情が許さないというのがその理由のすべてであったといえます。このため慈善事業家が一定額を拠出して育英会を設立し、選抜された英才に修学のための学資を給費する制度が明治中期ごろから全国に見られるようになりました。

幼少のころ寺子屋教育も受けず、義務教育にも縁のなかった伝右衛門が、同じ境遇にある好学の志ある者のために、大正天皇御即位記念事業の一つとして組織したのが「財団法人伊藤家育英会」です。当初基金として 20 万円(現在の約 10 億円)を寄附、大正 4 年(1915)9 月法人の認可を受け、事務所を福岡県庁内の学務課に置き、総裁は時の県知事谷口留五郎、理事長は県学務部長、顧問には九州帝国大学総長及び、旧制福岡高等学校長並びに県総務部長の 3 名が就任するという公的色彩の強い育英会でした。伝右衛門は理事 10 名の一人となっていますが、育英会の運営に口を挟むことは一切ありませんでした。

発足から第二次大戦終了まで 30 年間にわたって社会に貢献することに

なりますが、昭和 16 年（1941）には基金は 80 万円に増加されており、この間百数十名の英才を世に送り出しています。

この育英会の特色として世の称賛を受けたことは、他の育英会の多くが学資貸与方式をとって、卒業後月賦や年賦で償還させるのが常識であったのに対し、伊藤家育英会は一切の返還義務を設けず、また伊藤家関係の会社に入社するなどの条件も付さず、まったくの自由意志で希望のところに就職できるという点でありました。

◆文化財保護と活用のかなめ

飯塚市幸袋の旧伊藤伝右衛門邸の入場者数が 2015 年 2 月 16 日、2007 年の一般公開開始から、100 万人を突破しました。

8 年間で 100 万人ということは年平均 12.5 万人（ひと月に 1 万人以上）が訪れたということです。

2014 年に放送された NHK 連続テレビ小説「花子とアン」で、伝右衛門や妻だった柳原白蓮が登場人物のモデルとなったことで注目され、入場者が急増。2014 年 12 月の時点で、年間最多の 24 万人を超えています。

この事から文化財活用のかなめとして次の 3 つの事が言えると思います。

◎人々がこの文化財は大事だとか愛おしいと思う気持ちが大切。

◎その為には、感動するような出来事やお話、心に共感するストーリーが有れば良い。

◎その話を掘り起こしたり調べて見る事も文化財保護のかなめ。

郷土会、研究会の活動は、文化財に埋もれたストーリーを掘り起こし集客や活用につなげることで文化財保護の支援のかなめとなります。

令和7年6月28日

第58回 福岡県地方史研究協議大会

編集兼発行 福岡県立図書館ふくおか資料室